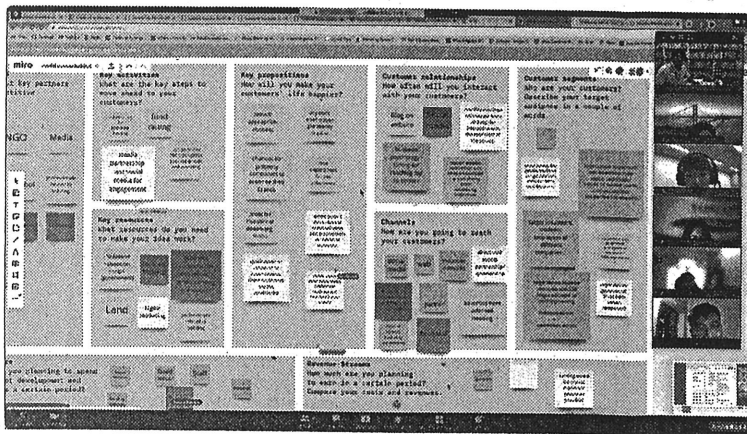


オンラインで海外研修を実施する

名城大学「国際フィールドワークⅡ(非英語圏)」

海外留学を目指して入る。2020年度はコロナ禍により海外研修が中止となったことにより、1年度はICTを活用し、海外企業から出された課題についてオンラインで繋がった海外の大学生と協働しプレゼンテーションを行うプログラムに置き換えて科目をデザインした。本科目の受講対象は、2年次の海外留学がコロナ禍のために中止となったという影響を被った3年生である。津村教授は現地に行くことができないまでも得られる経験はないかとコロナ禍におけるノウハウをもつ旅



オンラインでのブレインストーミング

業者と検討を重ね、科目を開講するに至った。津村教授の専門分野は文化人類学であり、現地のフィールドワークによる一体感に重きを置いていることから、当初はオンライン研修の効果に懐疑的であった。しかし、実施後予想を遙かに上回る学習成果を得られたことを実感されている。

オンライン研修のデザインは、事前授業(10コマ)・オンライン研修(10日間)・事後授業(5コマ)の3部で構成される。事前授業と事後授業を合わせた15コマは一部を除き対面で行われた。事前授業では、オンライン研修での課題遂行のために必要な基礎知識や調査技術を習得し、事後授業では、タイの日系企業訪問のほか、オンライン研修の体験を言語化する手法を実践的に習得する。この3段階を通して、海外の大学生との協働的なPBL実践の学びを、自らの挫折と成長の体験として語ることを目指されている。

10日間のオンライン研修はICTツールとしてZoomをプラットフォームとし、学生たちはオ

ンライン上のチーム学習に取り組み。海外の大学生(タイ16人、香港11名、ベトナム5人)と日本人学生(13人)は5チームに分かれ、企業課題(「タイのあるロックバンドを世界展開する手法について検討せよ」等)への提案を英語で発表することを最終目標とする。

初日は事前授業で作成した動画を用いたアイスブレイク、二つ目の企業からの課題提供、2日目はビジネスモデルとプレゼンスキルの講義、二つ目の企業からの課題提供を行う。3日目と4日目はチャットツールやオンラインツールを活用したグループディスカッションを行う。5日目にはビジネスレクチャーの講師からチームごとの提案へのフィードバックを行う。6日目と7日目は学生が自主的にオンラインで議論し、8日目にグループディスカッション、プレゼンテーションの最終リハーサルを行い、9日目に英語での最終プレゼンテーションを実施する。10日目は「アクティビティ」として、各国の大学生が現地の様子をオンラインで中継で伝える時間が設けられている。

海外の大学生とのオンラインによる協働学習
津村教授はICTを協働学習のためのツールの一つと捉え、授業目的を達成できる体験が生まれ

るよう工夫している。Zoomによる海外の大学生とのチーム学習では、5チーム9名のグループ編成で日本人学生を各チームに2〜3名と少数人数にすることで英語での活発なコミュニケーションを促している。

チームで使用しているICTツールはあえて指定せず、各国の学生が手慣れたものを紹介しながら利用させることで刺激を与え合う場としている。現地の大学生が用いたMicrosoft(マイクロ)というツールはオンラインホワイトボードへの書き込みや付箋への書き込みが可能な「汪回路」を利用して等々の「汪回路」を利用して効率的に行うことができ

る。また、オンラインの「The Office of the Power Point」を用いる学生だけでなく、Canvas(キャンパス)というデザイン作成ツールを用いて発表内容を集約する学生も見られた。英語が苦手な学生は、Zoomのビデオ会話での発言機会が少なくなるが、LINEを使って他の日本人学生にどう伝えればよいかを相談したり、Zoomのチャットボックスに自分のアイデアをテキスト入力し、それを他のチームメンバーが発言として取り上げる等の「迂回路」を利用して議論を進展させていった。

各国の大学生が現地の様子やオンライン中継するアクティビティでは、ギターを弾く学生、それに合わせてドラムを叩く学生、歌う学生が現れ、即興的なセッションが自然発生し、空間的には離れていても想像以上の一体感が醸成された。

オンライン研修を通じた学生の成長
オンライン研修の時間は、各日2時間半〜3時間半と、現地の研修時間と比較すると短い。しかし、Zoomのブレイクアウトルームでのチームごとの英語での議論は、互いの顔色を見ながらの判断が可能な環境で集中して濃密に行われる。津村教授はチームで

の議論においては基本的に極力発言しないように見守り、各日の最後30分では日本人学生だけがZoomに残るフォローアップセッションを設け、その日の反省点や悩みを全員が一言ずつ日本語で共有し、意欲の維持を可能にする環境を作っている。

受講生の成長は、毎回の授業後に大学LMSで提出するリアクションペーパーから読み取ることができ、最初は英語が聞き取れず、発言もできずショックを受けたという内容から、次第に「会話の方向性を左右する発言ができた」等の自身の成長を振り返る内容に推移し、最終プレゼンテー

ション後には「貴重な機会に携われたことを誇りに思う」という感想へと変化。困難や挫折を経験しながらも、途中でそれを乗り越える体験を経て、最終的には非常に前向きに捉えていることがうかがえる。

まとめ
津村教授はオンラインの利点として複数の海外大学の学生と同時に学ぶことができることを挙げている。Zoomというプラットフォームを通して学生たちは自宅にいながら海外の大学生とも配置した津村教授による授業のデザイン工夫があると言及する。(文責・関西福祉科学大学 久保田 祐歌)

に積極的に参加する学生、TOEICの点数をあげるため試験に申し込む学生も見られ、学習意欲の向上に繋がっていることもうかがえる。

短期間で想定を超えた成果が得られたこと等が総合的に判断され、今後も学部として本科目のオンライン研修を継続する方針とかがあった。こうした成果の背景には、現地でこそ得られる体験を重視し、ICTを活用することで海外の大学生との協働学習を効果的に配置した津村教授による授業のデザイン工夫があると言及する。(文責・関西福祉科学大学 久保田 祐歌)